



TITLE:

京都大学言語学懇話会 1994年度活動報告

AUTHOR(S):

CITATION:

京都大学言語学懇話会 1994年度活動報告. 言語学研究 1994, 13: 91-102

ISSUE DATE:

1994-12-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/87982>

RIGHT:

京都大学言語学懇話会
1994年度活動報告

第34回例会

1994年4月2日(土) 午後1:30~4:45

京大会館102号室

研究発表

「最適性理論における制約の配列について

— 日本語の外来語音受容の場合 —」

北原 真冬(D2)

「日本語における弱化した否定表現について」

服部 匡(同志社女子大学)

第35回例会

1994年7月9日(土) 午後1:30~4:45

京大会館211号室

研究発表

「現代ヘブライ語の二次語根の分類」

佐々木嗣也

(エルサレム・ヘブライ大学大学院)

「エチオピア西南部、オモ川流域の言語事情」

稗田 乃(大阪外国語大学)

第10回大会(第36回例会)

1994年12月17日(土) 午前11:00~午後5:00

京大会館211号室

研究発表

「名詞句内からの前置詞句の前置」

平塚 徹(京都産業大学)

「満洲字による漢字音表記の規範化

— 満洲字千字文を資料として —」 岸田 文隆(富山大学)*

「コモックス語の語構成について」

渡辺 己(D1)

「ハイダ語の形態法について」

堀 博文(D1)

「使役および間接受動構文における補文要素の格の照合について」

中村 裕昭(海上保安大学校)*

橋本喜代太(研修員)

「日本語の提題形式のデータ構造的意味とデータ操作的意味」

有田 節子(九州大学)

* 本誌掲載の同著者による論文を参照。

最適性理論における制約の配列について —日本語の外来語音受容の場合— 北原 真冬

現代日本語の語彙には、近年になって主に英語から借用された外来語が多数見られる。これらは決して原語そのままではなく、日本語化した形式で発音され、一般に通用する形式に定着する。この外来語音受容の過程は、音韻、音節、アクセントといった日本語文法の音韻部門の特性をとらえる上で、きわめて興味深い。

小野(1991)では特に、外来語に原語にはない促音が現れる問題が取り上げられ、モーラの重さや韻律外音化という装置によって促音の生起が説明された。しかし小野の規定するモーラ概念は一般性に欠ける上、韻律外音化の指定も恣意的であり、説明的な妥当性に乏しいものであった。また促音の分布とアクセントの関連も、小野の分析では全く扱われていなかったが、NHK発音アクセント辞典から促音をもった外来語を全て抽出したところ、420項目が該当した。その中で複合語と考えられるものや、アクセントのゆれがあるものを除くと、283項目あり、そのうち246項目は促音のある音節にアクセント核が位置することが明らかになった。

アクセントも考慮に入れて促音の分布を説明するために、最近の生成音韻論の分野において提唱されている最適性理論 (Optimality Theory, Prince & Smolensky 1993, McCarthy & Prince 1993を参照)の枠組みを用いる。その主要な特徴は、

- ・ 文法は配列化された違反可能な制約から成る
- ・ 音韻規則は存在しない
- ・ 制約は普遍的なものである
- ・ 言語ごとの変異は制約の配列の違いによる

である。ただし、この理論は言語産出の過程を扱ったものであり、入力辞書から与えられ、出力は音声部門に渡される、とするのが一般的である。一方、外来語が日本語の語彙に取り込まれる過程は、原語を入力、語彙項目として定着した形を出力、として扱う必要がある。

McCawley(1968)では「外来語や無意味語では語末から3モーラ目を含む音節にアクセント核」となることが観察されているが、外来語における促音は、この原則に少しでも近づけるために挿入されている、と考えることが出来る。最適性理論において提唱されている制約では(a) Nonfinality (b) Edgemost (pk; L; bimoraic foot)という二つがそれに関与する。

(1)	σ	σ		σ	σ	(2)	σ	σ		σ	σ
			-->	/				/	-->	/	/
	..μ	[μ μ]	 [μ μ]	[μ]	μ μ	[μ μ]	 [μ μ]	[μ μ]
	*			*			*			*	

(1), (2)に示すように、促音の挿入(下線付きモーラ)によってアクセント核は(a)最後のフットではなく、(b)2モーラから成るフットの左端、に位置するようになる。

小野の分析では/s/, /f/, /r/, /m/, /b/, -ing中の/g/が韻律外音化の指定を受けていたが、これらに共通する素性や、日本語の音韻構造上の特色は見出しにくい。これに関しては、まだ代案を示すにいたっていないが、Itô(1993)において論じられている、制約による語彙の階層構造を考えることで、より一般性のある説明が可能であるかも知れない。

(きたはら まふゆ 博士後期課程)

服部 匡

否定対極表現として文末の否定形式と対応し、全体として大きくない程度を表す要素にアマリ、サホドなどがある。次の例からも分かるように、これらの使用条件は同一ではない（アマリには「弱否定型」と「過度型」の二つの用法が存在するが、今前者を問題にする）。

(1) この犬は {あまり・さほど} 利口ではない。

(2) この犬は {?あまり・さほど} 馬鹿ではない。

大きいー小さい、長いー短い、広いー狭い、厚いー薄い、重いー軽い、強いー弱い、（背が）高いー低い、といった述語の対では前者が無標的、後者が有標的な要素と考えられるが、アマリ～ナイとは普通前者のみが共起する。

(3) これはあまり {大きくない・?小さくない}。

(4) 彼はあまり {強くない・?弱くない}。

また、良いー悪い、おいしいーまずい、利口だー愚かだ、上手だー下手だ、きれいだーきたない、美人だー不美人だ、などのように、片方が望ましい評価を受ける対の一群では、通常、前者すなわち肯定的な評価を受けるもののみがアマリ～ナイと共起する。

(5) これはあまり {良くない・?悪くない}

他に文脈状況から臨時に肯定的に評価される要素などを含め、何らかの意味で正方向と捉えられる尺度表現のみがアマリ～ナイと共起すると言える。

サホド～ナイは、アマリの場合のような尺度の方向性にかかわる制約を直接に受けることはない。

(6) 彼の部屋はさほど {広くない・狭くない}

(7) この犬はさほど {利口ではない・馬鹿ではない}

サホドPナイは、事柄Pの程度がある程度xに達しないことを表す。xはPという表現から自然に関心が持たれるような、Pに関して何らかの意味で有意味な程度である。この点で、本来のソ系列指示詞の機能が全く失われているわけではない。

なお、より詳しくは下記の拙論を参照して頂ければ幸いである。

服部匡（1994） 「アマリ～ナイとサホド（ソレホド）～ナイ」 『同志社女子大学日本語日本文学』 6

（はっとり ただす、同志社女子大学）

稗田乃

エチオピア西南部、オモ川の流域には、既に死語になって名前だけが人々によって記憶されている言語（ゴンバ語など）や、今まさに死語になろうとしている言語（オモ・ムルレ語、コエグ語、クエグ語、オンゴタ語、など）が存在する。ゴンバ語は、言語資料がないためその系統関係は一切、不明である。クエグ語はスルマ系の言語と考えられている。筆者が収集した資料から、オモ・ムルレ語とコエグ語もまた、スルマ系の言語であることが証明されつつある。オンゴタ語はクシ系の言語であろう。これら死語となりかけている言語は、それらを話す人々がおかれているそれぞれ異なる社会的な要因によって、様々な興味ある言語学的現象をみせている。ここでは、社会言語学的な議論は後の機会にゆずることにして、これらの言語のなかからオモ・ムルレ語を取りあげ、概略を述べ、また、その歴史を言語資料と口承伝統の両面から考察する。

オモ・ムルレ語は、オモ川の西岸をトゥルカナ湖から80 kmほど遡ったいくつかの村（アエバ、カチュレ、ナチュクル）で話されている。話し手は、現在、9名の老人のみである。但し、若い世代のなかにはその言語のいくつかの単語を記憶する者が存在するが、9名を除く人々は、彼らが吸収されてしまった民族集団の言語、ブメ語（トゥルカナ語の一変種でナイル諸語に属する）を第一言語として話す。

オモ・ムルレ語は、スルマ系の言語のなかでもスーダンで話されている南西スルマ系の諸言語（ムルレ語、ディディング語、ラーリム語）と系統的には近い関係を持っていると考えられる。オモ・ムルレ語をこれら3つの言語と比較してみると、いくつかの特徴（人称代名詞の形式、名詞語幹での語尾の脱落の傾向、オモ・ムルレ語とムルレ語だけで見られる $bVr > rVb$ の音韻転換）が、オモ・ムルレ語はディディング語やラーリム語とよりスーダンで話されているムルレ語と近い関係をもつ事実を示している。

言語資料を収集した際のインフォーマントでもあった2名の老人が語る彼らの歴史によれば、彼らは故地で自らをニイベタ（*Nyipeeta*）と呼んでいた。そしてニイジェ（*Nyijie*）に住んでいた。ニイベタという名前は、スーダンのピボル・ポストでムルレの人々が周囲にすむ民族集団から呼ばれている名前（エベイタ、カベイタ、カベタ）と極めて似ている（*Nyi* は接頭辞である）。ニイジェは、スーダンのボーマ・プラトーの近くに住むジェからの分派を指す名前である。老人達が語る民族移動のなかで歴史的な出来事が生じた地名を順に地図に当てはめていくと、スーダンからエチオピアの現在の場所へと導いてくれる。言語の資料からは、オモ・ムルレ語とムルレ語がディディング語とラーリム語から分かれた後、オモ・ムルレ語はムルレ語と分かれたことを示している。口承伝統と総合して考えると、彼らはスーダンからエチオピアへ移動してきたことが分かる。

（ひえだ おさむ、大阪外国語大学）

平塚 徹

本研究は、(a)のように、前置詞句が、直接目的語に先行しているにも拘らず、それを修飾していると解釈し得る構文（以下、VPN）を扱う。

(a) Il a dessiné de Jean un portrait caricatural.

このような前置詞句と目的語の関係は、前置詞が動詞ではなく目的語名詞によって要求されているという事実に反映している。

先ず、VPNは前方照応的な目的語を許容しない。よって、目的語が不定である(a)は自然だが、定である(b)は不自然である。

(b) ? Il a dessiné de Jean le portrait caricatural.

目的語が定であるのは、指示対象が先行文脈と独立に確定する場合である。

(c) Cette règle présente sur les précédentes l'avantage d'être exhaustive

(d) s'il n'avait pas eu de sa fonction la haute idée que l'on sait

(e) Il a dessiné de Jean le portrait le plus caricatural que je connaisse.

(f) On peut donner de cette opération la représentation suivante.

また、動詞は、目的語の指示対象の場面での存在や、場面への登場を示すものがよく、逆に場面での存在を前提するものは不自然である。

(g) ? Il a jeté de Jean un portrait caricatural.

但し、そのような他動詞でも、文脈によって意味的に軽くなる場合は許容される。

これらの事実、VPNが目的語の指示対象を談話内世界に導入していることを示している。前置詞句に関しては、目的語の指示対象の同定にとって本質的な属性を表すものでなければならない。

VPNを生成するのに、目的語名詞句から前置詞句を抜き出したり、初めから前置詞句のための枠を有する他動詞を予めレクシコンに記載しておくという方法には問題がある。よって、(h)のような余剰規則を提案する。

(h) V:[__ NP] → V':[__ NP PP]

この規則によって派生された動詞を含む文は、次の意味論的語用論的制約に従う。

(i) 直接目的語の指示対象を談話内世界に導入する。

(j) 前置詞句は直接目的語の指示対象の同定にとって本質的な属性を表す。

この制約が、前置詞句・目的語という実際の語順ではなく、(h)によって派生された語彙項目に掛かると考えるのは、(k)のように前置詞句を残して目的語を接辞化した構文がVPNと並行的に振舞うことを簡潔に捉えられるからである。

(k) Il en a dessiné de Jean.

(ひらつか とおる、京都産業大学)

渡辺 己

コモックス語(カナダ, ブリティッシュ・コロンビア州, セイリッシュ語族)は, 一語中に多くの形態素を盛り込みうる, いわゆる複統合的言語である。もちいられる文法的手法は, 主に重複法(少なくとも8種)と接尾辞であり, その他には, 若干数の接中辞と接頭辞, そして母音変換が認められる。

接尾辞の中で, いくぶん特徴的だと思われるものは, 「語彙的接尾辞」(lexical suffix) と呼ばれている, 具体的, 語彙的な意味を持つ接尾辞である。これらの多くは生産的に使用され, 語構成において重要な役割を果たす。機能的には名詞抱合における名詞項に似たところがあるが, 語彙的接尾辞の多くは, それぞれが意味的に対応する自立語と, 形式的に関連がない(例えば, 「(魚の)網」の自立語 p'aʔač', 語彙的接尾辞[以下 =で示す] =Jan)。そしてこれらは, その名が示すとおり, 純然たる付属形式であり, 先行する語幹なしでは成り立たないものである。従って名詞抱合とは明らかに異なるものである。

コモックス語について, 調査の現段階で確認できている語彙的接尾辞は50弱であるが, セイリッシュ語族の他の言語には300程の語彙的接尾辞を持つものもある。意味的には, 身体部位名称(頭, 口, 目, 鼻, 胸, 背中, 臀部, 膝, 足など多数)自然物(火, 水, 風, 木, 石など), 人造物(カヌー, [箱などの]ふた, 毛布, [魚の]網, 服など), 人, 子供など, 多岐に渡る。

語彙的接尾辞が語の中で担う機能も多岐に渡る。語幹に付いて, 合成名詞にいくぶん似た語を派生することもあり([以下の例は全てスライアモン方言から] č'əf=əkʷt 「レインコート」雨=毛布), 数詞に付いて類別数詞的に機能するものもある(mus=us 「4トール, 丸い物四つ」4=頭)。中にはその意味が比喩的にかなり拡張されたものもある(huJ=uθin 「食べ終わる」終わる=口)。さらに, 場所, 部分を表すために語彙的接尾辞が使われる。その際, それらの接尾辞が述部に対して担う機能は, 主語的目的語的, さらに属格の名詞項的とさえ考えられることがある。例えば, ʔah=ʔaʔ 「喉が痛い」(痛む=喉), ʔaʔp'=iws-θi 「おまえの身体を拭く」(拭く=身体-2sg目的語制御他動詞), tuw=qi-θ-a čxʷ 「私の声分かるか?」(分かる=口・声-1sg目的語制御他動詞-疑問 2sg主語[後倚辞])。そして中には語彙的接尾辞が具格的に機能する例もみられる。例えば, yəm-yəm=šən-əm 「自転車」(複数[CəC 重複]-蹴る=足-自動詞?)。

(わたなべおのれ・博士後期課程1年)

ハイダ語の形態法について
手段接頭辞 (operative) と類別辞 (classifier) を中心に

堀 博文

ハイダ語 (Haida, 系統不明) は、北米インディアン諸語の 1 つで、カナダ北西部ならびにアメリカ合衆国アラスカ州南部に分布する言語である。本発表では、ハイダ語スキドゲイト方言 (カナダ北西部クィーンシャーロット諸島スキドゲイトで話される) の形態法に関わる諸要素のうち、手段接頭辞と類別辞について概観する。

ハイダ語の動詞複合体の構造は、以下の如くである。

使役 — { 手段—類別
 自動詞化 } — 語根 — 派生 — 屈折

手段接頭辞 (operative あるいは instrumental prefix) の機能は、大きく次の 3 つに分けられる。

- 1) 動詞が表わす行為に用いられる道具を表わす。「～を用いて」
- 2) 使役「～することによって/～を用いて、～させる」
- 3) 受動

当然のことながら、手段接頭辞は、動詞に付加されるものであって、名詞に付加されて、具格的な意味を表わすものではない。

手段接頭辞の中には、意味的につながりのある自立名詞や動詞と、形式の上でも語源的に関係があると見られるもの (例えば、「唇によって」と「唇」、「吹くことによって」と「吹く」など) がいくつかある。それらは、手段接頭辞が自立語から接頭辞となったことを窺わせるものと考えられる。

類別辞 (classifier) は、自動詞主語あるいは他動詞目的語として振る舞う名詞の意味的特徴 (例えば、どのような形状か、有生物か無生物か、など) を表わすものである。ハイダ語における類別辞は、動詞に付加されて、それと統語的に関係のある名詞がどういった範疇に属するかを示し、個々の名詞がどの範疇に属するかは決まっておらず、また、それらが動詞と照応することがないという点で、バントゥ諸語などにみられるような、いわゆる名詞クラスとは異なる。

ハイダ語には、約 400 種ほどの類別辞があるといわれているが、話者の話せる程度に応じてその種類は異なってくるようである。実際、流暢な話者ほどそれぞれの名詞に適した類別辞を用い、使える類別辞の範囲が広いのに対し、あまり流暢でない話者は、使用する類別辞が限られており、例えば、無生物であれば、その形状には一切関係なく、無生物を表わす類別辞を使う傾向が観察される。

(ほりひろふみ・博士後期課程 1 年)

提題形式の操作性

有田節子 田窪行則

人間の記憶の制限や注意力などに制約されない理想化された状態での計算システムがモデル化された生成文法の言語能力に対し、本研究は記憶、注意などに制約された状態で、このような計算システムが入出力をどのように実現するかをモデル化することをめざす。本発表は、そのような言語運用モデルの構築のために何が必要であるかがある種のメモリー管理モデルを提出することによって示す。

対話活動においては、対話参加者の持つ長期的記憶のすべてが総動員されているのではなく、対話相手や対話の目的に特化した部分が活性化され、アクセスしやすい形でデータベースが作成されていると考える。当面の目的から、このデータベースはある種のファイル形式で情報を格納していると仮定する。対話では、このデータベースから対話内容を構成するのだが、その際、データの一部を「作業バッファ」（対話的談話処理のシステムとして仮定した局所的な心的領域）に転送する。この心的領域は、知識ベースへのアクセスパスを定義するポインタとポインタにリンクしたインデックスファイルの格納場所のようなものとして捉えられる。言語表現は、記憶や知識そのものに言及するよりも、記憶や知識内容にリンクされたポインタやインデックスを操作するものだと考える。

発表では、日本語の提題形式「ハ」を題材にし、われわれ人間が対話において行っている操作の一端を明らかにした。すなわち、「AハB」という構文は、意味的には大きく二つのタイプに分けることができ、

- (1) 述語わりあて文
 - ・ 太郎は賢い。
- (2) 値わりあて文
 - ・ 責任者は太郎だ。

これらの文はどちらも「主題」を表すと言われるが、適切な文脈を与えてやると対比的な解釈にもなる。この構文が以上のような多様な意味を持つことを、「ハ」に以下のような一貫した操作的機能を与えることにより説明した。

- (3) (1) データベース内の特定のファイルにリンクされたポインタとインデックスファイルを談話作業バッファに設定する。
- (2) リンクされたファイルからファイル定義に必要な情報を談話作業バッファ内のインデックスファイルに写す。
- (3) (1,2)により、述語付けされる属性変数の値域を設定する。つまり、当該ファイルのうち、インデックスファイルに写されなかった部分が値域である。

(ありた せつこ、たくぼゆきのり、九州大学)